Osaka University Knowledge Archive

Title	ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 の開催を通じて感じたISO コミュニティ通訳認証の可能性
Author(s)	栗田, 佳典
Citation	ISOコミュニティ通訳認証制度実績報告書. 2023, p. 19-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92567
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 の開催を通じて感じた ISO コミュニティ通訳認証の可能性

特定非営利活動法人関西 NGO 協議会

栗田佳典

1．はじめに

2014 年よりグローバル課題を解決する若い世代の育成，市民社会組織の理解者の育成を目的に始まった「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth～私たちが描く持続可能な社会の未来図～(以下，ワンフェスユース)」事業は，2015 年からは高校生が企画に参画するし，以後 8 年間，高校生，NGO，学校教員，企業，そして大学生のサポーターとともに実施を続けてきた．

2015 年 9 月に国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）の認知と実践も高まり，2023 年 5 月の電通発表の調査*1によれば，日本の 10 代から 70 代の SDGs の認知率は 96.1%となり，SDGs について 87.3%がポジティブな印象を持っているとされる．また，「内容まで含めて知っている」と回答した 10 代男性は 58.5%，10 代女性は 72.4%となり，他の全世代の同回答が 50%を下回る中，SDGs の内容を含めて知っている方が多い 10 代の結果は突出している．これらの結果を踏まえ，SDGs の認知が高まる中で，学校以外での実践的な活動の場や，既に活動を始めている若者同士や実際に取り組みを行う NGO 等の関係者と繋げる場が求められてきており，時代の流れとともに，ワンフェスユースはそのニーズに応えながら進化をしてきた．

本稿では，SDGs を基盤とするワンフェスユースの開催報告とその経験を踏まえた ISO コミュニティ通訳認証の可能性について考察する．

2．2022 年度ワンフェスユースの開催概要

第 9 回目となる 2022 年度のワンフェスユースは，新型コロナウイルス感染拡大に十分に注意しながら，3 年ぶりの対面開催を再開し，オンラインも一部プログラムで導入すること

*1 https://www.dentsu.co.jp/news/release/2023/0512-010608.html（最終閲覧日 2023 年 11 月 30 日）

で対面とオンラインのハイブリッドでの開催となった．2022 年度の目的，内容は以下の通りである．

《目的》

1）将来，世界的な視野を持ち，地球市民として社会課題の解決に向けて行動する次世代の育成

2）SDGs 達成の重要なアクターであるユース世代と国際協力分野のネットワークの強化，連携の促進

3）「子どもの権利条約」の理解向上と子どもの権利を尊重した運営の実践

《内容》

8 名による高校生実行委員会を組織し，8 月より当日プログラムの全体構成について話し合い，「興味の種から花束を」とスローガンを作り，プログラムの企画，立案，調整，実施を行った．世界の現状について，同世代に伝えるだけでなく，いかに他人事ではなく自分に関わる事柄として次の行動につなげる問いを立てることができるかを考え，開会式，閉会式に加え，以下のプログラムが開催された．

「①【衝撃】私たちが知った日本の難民受け入れの事実」「②他人事じゃない！核軍縮について知ろう！」「③「食べる」から世界を知ろう！～貧困で苦しむ人々の食事とは～」「④貧困問題をビジネスで改善できるの？～ソーシャルビジネス～」「⑤学校で SOGI や LGBTQ+ について考える機会をつくりませんか（ユース提言プログラム）」の計 5 つのプログラムと常設展示として，「震災は遠い問題じゃない」を実施した．

また，高校生実行委員会による企画だけでなく，NGO による企画や高校生・大学生などユースチームが学校や国際協力スタッフと連携し，ワークショップの企画や学習した成果報告会として，以下のプログラムが開催された．

「①ユースによる実践を見据えたアドボカシーワークショップ～社会に声を届けるということ」「②高校生のための SDGs アクションプランコンテスト」「③ユースのための国際交流×オンラインスタディツアー報告会」「④「性別思い込みあるある」を見て一緒に考えよう！ 自分と他の人の心とからだを大切にするレッスン」「⑤ユースアクション報告会」「⑥暮らしの中の「水」について考えよう－アジア各国の現状に触れて」計 6 つのプログラムでは，高校生などユース世代によるディスカッションや質疑応答が行われ，他の高校やユースチームに所属するユース世代が繋がる場となった．

その他，密を避けるためのパブリックビューイングルームや休憩室の設置，外務省 NGO 相談員相談ブースや NGO による活動紹介コーナーを設け，NGO と高校生参加者が直接話

をする機会を設けた.

３．2022 年度ワンフェスユースの成果と考察

2022 年度は 11 のプログラムを実施し, 来場者は延べ 1300 名 (プログラム参加者総数), 当日高校生ボランティア 41 名，参加高校 28 校，参加 NGO9 団体が参加した．2020，2021 年度に実施したオンライン開催の経験をいかし，オンライン参加の方にも内容がしっかりと伝わるように配慮, 工夫をしつつ, 会場に来場いただいた参加者とともにプログラムを進めることができた. 8 名の高校生実行委員はそれぞれが関心を持つテーマが異なり, 2022 度は「難民」「貧困×食」「核軍縮」「ソーシャルビジネス」「震災」「ジェンダー」と多様なトピックでのプログラムとなり，身近なところから SDGs を考える，自分と関係があるテーマと SDGs をつなぎ，行動に移すきっかけを提供するプログラムが多かった．参加者も満遍なく各プログラムに参加があり, 参加者の関心の幅広さも実感した．さらに実際に取り組みを行うユース世代からの声を聞くことは，参加者の高校生にとって大きな刺激になり，「同世代の高校生が主となって行動していたところに憧れを抱いた．すごい．自分もこんな高校生になれたらいいなと思った」「参加した 4 つのプログラムはどれも楽しく学ぶことができた．他校の方々と交流する機会はあまりなかったので，とてもいい機会になった」などの参加者の声が寄せられた．さらに来場者アンケートからは，イベント全体の満足度への質問に対して大変満足が 38%，やや満足が 29%，普通が 4%，やや不満が 2 %，回答なしが 27%となり，満足以上の回答が 67%を占めた．来年も参加したいかの質問に対しては 69%が「はい」と回答する結果となった．会場では熱心にメモを取りながらプログラムに参加する高校生の姿がみられ, オンラインでは神奈川県や山形県からの参加もあり, 全国規模で高校生に参加してもらう機会となった．2022 年度の経験を今後のワンフェスユースの開催に活かしていきたいと考えている.

これまでの事業の統計としては，ワンフェスユース参加者累計（2014 年～2022 年度）は延べ 3 万 3300 名に上り，高校生実行委員に参加し，企画運営に深く関わった高校の生徒人数 （2015 年～2022 年度）は延べ 181 名となった．多くの高校生世代への機会をつくることができた．2022 年にはその功績が認められ、SDGs ジャパンスカラシップ岩佐賞教育の部を受賞した.

４．ISO コミュニティ通訳認証の可能性と考察

ワンフェスユースは時代とともに進化をしながら取り組みを進めてきたが, SDGs の関心が高まるにつれ, その課題意識は海外に向き, なかなか自分の足元に向かない場合が多い. しかし, これまでのワンフェスユースを担ってきた高校生たちは、自分の足元にこそ SDGs 達成に向けた重要なヒントがあることについて、プログラムを通して私に教えてくれた. 例えば, 日本に住む難民の現状を知ったり, その問題に対して自分にできることを考えたり, 2022 年度には外国にルーツを持つ子どもたちを対象にした企画が行われたりと, 高校生が進める企画は自分の足元を見る大切さを再認識する機会となった.

関西 NGO 協議会が拠点を置く関西地域の学校の定時制では 2022 年度の入学者の半数以上が海外にルーツを持つ方になるなど, 学習面, 生活面においても多文化共生は日を増すごとに重要なテーマになってきている. 特に在住外国人や外国にルーツを持つ子どもたちが公平で安心して日本で過ごすために何ができるのか, これを考えるうえで重要なのがコミュニティ通訳なのだと私は考える. 2019 年度のワンフェスユースのプログラム内で「言語の壁を越える能力って何？」と題し,「適正テスト」のサンプル・デモを林田雅至氏監修の下, 実施いただき, 私ははじめてコミュニティ通訳の存在とその意義を学ぶことができた. 以後、コミュニティ通訳の担い手を示す ISO コミュニティ通訳認証とそれに向けた「適正テスト」が実施され, コロナ禍でオンライン化に対応しながら、認証者数は 20 名[*2]になった（関西 NGO 協議会としてその実施における広報などの協力を行った.）

現在, AI 技術の発展は著しい. しかし AI 技術では対応がしにくい個別の信条や思想を配慮した応対がコミュニティ通訳においては必要な場合があると私は考える. 多文化共生に取り組む NGO 関係者とも話をしてきたが, AI 技術の発展によるコミュニケーションや書類の効率化など良い面を活かしつつも, 人間が得意とするひとり一人にあった応対によるコミュニティ通訳については, ISO コミュニティ通訳認証といった客観的評価によってその存在を今後も確立していくものだと考える. 認証に向けた適正テストは, そのプロセスにおいても, コミュニティ通訳のプロを育てていく人材育成の一環ともいえる. また, そのプロセスは同時に, 自らの母語に対する理解力について改めて考える機会にもなることは ISO コミュニティ通訳認証が持つ魅力でもある. このような機会に高校生たちが, 近い将来, ISO コミュニティ通訳認証の受検を通して, 自分が住む地域で誰ひとり取り残さない社会をつくる担い手になることを期待し, その情報と機会を提供し続けたいと考える.

[*2] ISO コミュニティ通訳認証実績報告書. 2022 まえがき ：「適正テスト」が始まり, ISO コミュニティ通訳認証の一翼を担う, 林田雅至氏, 2022 年

ワンフェスユースは今後も時代の流れとともに進化する事業になる．そのイベントに参画いただいたユースの皆さんが，世界か自分が住む地域か「どちらか」でなく，「どちらも」という選択肢を持ち，様々な場所での担い手になれるよう，意識をしてワンフェスユースを作り上げていきたい．そして、ISO コミュニティ通訳認証のさらなる認知拡大と認証者増に貢献していきたいと考えている．

謝辞

大阪大学名誉教授・林田雅至氏には，ワンフェスユース発足当初より市民社会組織，教育関係者，そして高校生を繋ぐ役割を担っていただいただけでなく，2021，2022 年度は相談役として運営において多くの助言やサポートを通して，ワンフェスユースの事業継続・発展に多大なる御力添えをいただいた．さらに 2021 年度に続き，今年度も本稿の機会をいただき，より多くの方にワンフェスユースの取り組みを伝える機会を設けてくださった林田雅至氏に厚く御礼申し上げる．

《参考資料》

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 Online 事業実施報告

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 公式ホームページ https://owf-youth.com

≪略歴≫

栗田佳典

特定非営利活動法人関西 NGO 協議会　事務局長・理事

1986 年，静岡県生まれ．立命館大学産業社会学部卒．大学在学中に子ども兵の問題に強い関心を持ち，2009 年 4 月，テラ・ルネッサンスに入職．海外の情報や現地での出逢い，そして自身の心臓病の経験をもとにした命や人権，平和に関する講演を 516 回，述べ 5 万人以上を対象に実施．自身の経験をもとに，関西の市民活動をさらに促進させるため，2021 年 12 月よりテラ・ルネッサンスから関西 NGO 協議会に転籍．2021 年 12 月以降は特定非営利活動法人関西 NGO 協議会職員として働いている．2022 年 4 月より現職．2020，2021 年度，国際協力・SDGs 普及啓発事業「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth～私たちが描く持続可能な社会の未来図～」の運営委員長を務めた．

（投稿日：2023 年 7 月 30 日）

（受理日：2023 年 8 月 6 日）